

親への愛着と親、友人との心理的距離の関係

Parental attachment and psychological distance to parents and friends

丹 羽 智 美

Tomomi NIWA

要旨

本研究では親への愛着と親、友人と自己との間の心理的距離の関連について性差も含めて検討することを目的とした。人は複数のサポート提供者を持っており、それらを使い分けることによって心身の安定を保っている。愛着理論によると、親への愛着が良好であると複数のサポート提供者に対して頼りやすい関係をつくることができる。しかし、親には頼れないが友人には頼れる場合がある。そこで、サポート提供者との関係を心理的距離を指標に測定し、主なサポート提供者である父親、母親、友人と自分との間の心理的距離を描画法を使って測定した。それらと親への愛着との関連を検討した結果、男性は父親、母親と、女性は母親、友人との心理的距離が愛着と関連していた。また、父親、母親、友人との間の心理的距離をクラスター分析した結果、近距離群、中距離群、父母遠距離群、父遠距離群に分けられた。クラスターごとの親への愛着の様相を検討した結果、父遠距離群の愛着回避、愛着不安とも低かった。このことから、両親のどちらかとの愛着が良好であれば親への愛着が良好に作られえること、加えて友人とも心理的距離の近い関係が築けていることが示された。

キーワード：愛着 心理的距離 描画法 親 友人

問題と目的

最初の人間関係は養育者¹⁾との関係である。親子関係のあり方が子どもの様々な側面に大きな影響を及ぼすため、親子関係は常に注目され、研究されてきた。そうした中で、親子それぞれの発達によって関係性が変容していく部分と、変容しにくい部分が明らかになってきた。

親子関係の中で変容しにくい部分の1つが愛着である。愛着について“愛着対象との永続的な情緒的絆”と定義されることが多いが、本質は“危機的な時に特定の対象から支援・保護を受けられるという確信や信頼感” (Bowlby, 1969, 1973, 1980) である。

このような愛着は生まれてからの親子の相互作用で作られる。特に重要視されているのは、近接可能性と情緒的応答性を得られるような養育環境である。近接可能性とは、子どもが不安や恐怖などを喚起する状況に直面したとき、すぐに助けを求められるような場所に親がいてくれるという確信である。情緒的応答性とは、子どもからの助けを求めるシグナルに親が敏感に気づき、安心できるようなケアを親が提供してくれるという確信である。近接可能性と情緒的応答性を得られるような養育環境が、“危機的な時に親から支援・保護を受けられるという確信や信頼感”を作っていくのである。

そのような親の有用性に関する確信の形成と同時に、自分は親から保護され、愛されるだけの価値があるという自己の有用性に対する確信も作られる。これらの確信を用いて、親子間で起こる種々の出来事を解釈し、心的にシミュレートして未来を予測し、自らの行動を決定していくようになる。このような機能を内的作業モデル（Internal Working Models）という。このような機能があることで、例えば危機的な状況に置かれたとしても、心身の安定を保持できるのである。そして、このような心的状態は生涯を通じて持たれているものであり、幼児期だけの問題ではないことも指摘されている。

一方、親子関係の中で変容していく部分も存在する。特に青年期は親子関係の再構成の時期であり、関係性に大きな変化が起こると言われてきた。その要因の1つが青年の親からの自立である。Hollingsworth（1928）は、青年には家族の監督から離れ、一人の独立した人間となろうとする衝動が現れるとし、それを心理的離乳と呼んだ。Blos（1979）は、青年期に起こる親からの分離の過程を幼児期の分離－個体化過程と対比させ、第二の分離－個体化と呼んだ。このように、青年期になると親から情緒的に離れようとする傾向がある。

それをPipp, Shaver, Jennings, Lamborn & Fischer（1985）は描画テストから明らかにしている。大学生を対象に幼児期からの発達段階ごとに親と自分のサークルを描かせることによって、発達段階による親子関係の差異をみていった。すると、幼児期では密着していた親子のサークルが青年期に入って距離を広げ、成人前期になると再度親子のサークルが近接するという過程をたどっていた。

上記の愛着と自立は一見矛盾し、共存しないようにみえる。しかし、高橋（2010）は以下のように述べている。“他者への接近（依存）と回避（自立）は、それぞれの状態だけを記述すると確かに反対の姿に写るのであるが、（途中略）、両者の関係の内実は、少なくとも人間社会にあっては、自立するためには十分にある質の依存が可能であるという状況にあること、つまり、本人が必要な時には依存してもいいし、それを受け入れてもらえるはずだという確信が持てる状態であることが必要だということである。”このように愛着と自立は相反するものではない。親の価値観から離れ、自分で自分自身を作っていくためには、その過程で起こるであろう危機的状況において手助けしてくれる存在がいるという確信が必要なのである。つまり、親子の間の愛着と自立は密接にかかわっていることがわかる。

しかし、危機的状況になった時、手助けしてくれる可能性があるのは親だけではない。内閣府（2009）による『第8回世界青年意識調査』において、青年の相談相手として「近所や学校の友だち」が53.4%で最も高く、以下「母」（47.1%）、「父」（22.2%）、「きょうだい」（21.3%）、「恋人」（19.9%）となっているように、青年期に相談相手として選択されることが最も多くなるのが友人である。では、親と友人からのサポートをどのように使い分けているのだろうか。

愛着理論によれば、親への愛着が良好な人は内的作業モデルも良好に作られている。そのため、人に支援を求めて助けてもらうことが容易にできると言われている（e.g. Feeney, 2004）。しかし、親への愛着がうまく作られず、親には支援を求めることができにくい、友人が主要なサポート提供者となっていることによって、青年の心身の安定を支えていることも考えられる。高橋（2010）は“重要な他者と情動的な交渉をしたいという要求を充足させる人間関係”

であり“人間の生存や安寧にとって不可欠な情動的な関係”を「愛情の関係」と命名し、個人をとりまく複数の他者による愛情の関係を検討したところ、家族が主なサポート提供者となっている家族型と、家族以外がサポート提供者となっている非家族型に大きく分けられたことを述べている。つまり、もし親への愛着がうまく作られず、親がサポート提供者となれなくても、それを補う他の存在がいる可能性がある。

サポート提供者としての重要度を視覚的に示したのが、Kahn & Antonucci (1980) によって提案されたコンボイ・モデルであろう。これは、個人を取り巻くサポート提供者の構造をモデル化したものである。個人を中心円としたとき、それをとりまく最も内側の円には、最も重要なサポート提供者が入り、第2円、第3円と中心から遠くなるに従って重要度の低い人が入る。つまり、中心円に近づく人ほど信頼感や安心感、親密性を高く持たれており、必要な時に頼りにされる対象であると考えられる。

このようなとらえ方は、金子 (1989) が定義した心理的距離という概念に類似すると思われる。心理的距離とは“自己がある他者との間でどれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合い”と定義されている。親や友人との間の心理的距離が近いということはコンボイ・モデルの中心円に近いということであり、その対象は重要なサポート提供者としてみなすことができるだろう。そこで本研究では、親への愛着と親、友人との心理的距離との関連を検討することとする。

心理的距離が比較的近い対象として考えられる親、友人との間の心理的距離を比較すると、女性では父親>母親=友人となることが金子 (1989) で示されている。しかし、その様相が男性ではどうなるのかについてはこれまで検討されていない。土田・田中・鈴木 (2009) では、男女とも父親よりも母親に対する方が心理的距離が近いという結果が得られていることから、主な子どもの世話を担っている母親に心理的距離の近さを感じることは性差がないようである。一方、友人関係においては女性の方が親密で情緒的な友人関係を持つ傾向があるため、友人との心理的距離は女性の方が近いと考えられる。このような親との間の心理的距離と友人との間の心理的距離を相対的に比較したとき、男性も女性と同様の傾向を示すのか、または、心理的距離が最も近いのが友人であり、その後に母親、父親と続くのか、それとも、友人や親との心理的距離が逆転するのか、検討することが必要であろう。そのため、性差も含めて検討することとする。

方法

調査協力者 大学生136名（男性79名、女性57名）であった。平均年齢は19.53歳 (*SD* 1.11) であり、性別の平均年齢は、男性19.87歳 (*SD* 1.18)、女性18.91歳 (*SD* 0.60) であった。

調査方法と内容 以下の内容で構成された質問紙に対して、授業内で回答を求めた。

親への愛着 丹羽 (2005) の“愛着回避”9項目、“愛着不安”8項目からなる親への愛着尺度に対して、5段階評定による回答を求めた。

サークル画 Pipp et al. (1985) によって用いられた描画テストとKahn & Antonucci (1980) のコンボイ・モデルを参考にした。質問紙の中央にサークルが書かれており、それを自分

とした時、父親、母親、最も仲の良い友人をサークルで適当な場所に書き入れるよう求めた。2者のサークルの間の距離を心理的距離とした。自分-父親、自分-母親、自分-友人、父親-母親の距離を描画から求めた。

心理的距離は、2つのサークルの中心を通る線を引き、2つのサークルの間の距離を測定した。Figure 1の実線部分がそれに当たる。単位はmmである。サークルが重なっている場合は、距離はマイナスとなる。

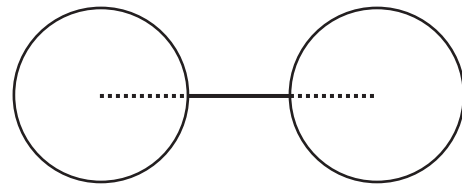


Figure 1 サークル画における
心理的距離の該当部分

結果

親への愛着尺度の信頼性と父親、母親、友人との間の心理的距離の比較

親への愛着尺度の信頼性を検討するため α 係数を求めた。すると、“愛着回避”が $\alpha=.80$ 、“愛着不安”が $\alpha=.89$ であった。このことから十分な内的整合性があることが確認できた。

次に父親、母親、友人との間の心理的距離の比較を対応のある分散分析で行った。球面性の仮定が満たされなかったので、Greenhouse-Geisserの方法で自由度を調整して有意性の検定を行った。平均値とSDをTable 1に示す。その結果、対象による効果がみられた($F(1.62, 218.65) = 43.26, p < .001, \eta^2 = .24$)。多重比較をした結果、父親との心理的距離>母親との心理的距離>友人との心理的距離の間で有意差がみられた。

次に性別に同様に分析した。平均値とSDをTable 1に示す。その結果、男性では対象による効果がみられ($F(1.49, 116.51) = 33.68, p < .001, \eta^2 = .30$)、父親との心理的距離>母親との心理的距離>友人との心理的距離の間で有意差がみられた。女性においても対象による効果がみられ($F(1.69, 94.60) = 13.96, p < .001, \eta^2 = .20$)、父親との心理的距離>母親との心理的距離=友人との心理的距離の間で有意差が示された。以上より、各対象との心理的距離の近さには性差が認められた。

Table 1 愛着尺度と父親、母親、友人との心理的距離との間の相関係数と各変数の平均値、SD

	愛着回避	愛着不安	父親	母親	友人	全体		男性		女性	
						平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD
愛着回避	-	-				2.77	0.75	2.90	0.60	2.58	0.90
愛着不安	.47 ***	-				1.80	0.77	1.79	0.65	1.81	0.91
父親	.16	.07	-	-		45.72	39.74	49.99	40.48	39.81	38.26
母親	.57 ***	.32 ***	.36 ***	-	-	23.75	24.08	30.13	25.44	14.91	18.94
友人	.27 **	.27 **	.08	.30 ***	-	17.01	23.67	17.29	17.23	16.61	30.60
父母	.20 *	-.06	.59	.33 ***	.06	47.47	54.39	52.65	58.69	40.30	47.36

* $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$.

注) 心理的距離の平均値の単位はmmである

親への愛着と父親、母親、友人との間の心理的距離との関連

親への愛着と父親、母親、友人との間の心理的距離の間の相関係数を求めた。その結果がTable 1である。母親、友人との心理的距離と愛着回避、愛着不安との間には有意な正の相関がみられた（愛着回避と母親 $r = .57, p < .001$; 愛着不安と母親 $r = .32, p < .001$; 愛着回避と友人 $r = .27, p < .01$; 愛着不安と友人 $r = .27, p < .01$ ）が、父親との心理的距離と愛着との間には有意な相関は得られなかった。

性別による親への愛着と父親、母親、友人との間の心理的距離との関連

性別によって関連の仕方に差が出る可能性があるため、性別に親への愛着と父親、母親、友人との間の心理的距離の間の相関係数を求めた。その結果がTable 2である。男性では父親との心理的距離と愛着回避の間（ $r = .39, p < .001$ ）、母親との心理的距離と愛着回避（ $r = .55, p < .001$ ）、母親との心理的距離と愛着不安（ $r = .32, p < .01$ ）との間に有意な正の相関がみられた。女性では父親との心理的距離と愛着との間には有意な相関がみられず、母親、友人と愛着回避、愛着不安との間に有意な正の相関がみられた（愛着回避と母親 $r = .60, p < .001$; 愛着不安と母親 $r = .41, p < .01$; 愛着回避と友人 $r = .37, p < .01$; 愛着不安と友人 $r = .35, p < .01$ ）。このことから、男性は愛着と関連するのは父母との心理的距離だが、女性は母親、友人との心理的距離が愛着と関連することがわかった。

Table 2 愛着尺度と父親、母親、友人との心理的距離との間の相関係数（性別）

	愛着回避	愛着不安	父親	母親	友人	父母
愛着回避	—	.59 ***	-.10	.60 ***	.37 **	.08
愛着不安	.34 **	—	-.02	.41 **	.35 **	-.08
父親	.39 ***	.15	—	.17	.10	.56 ***
母親	.55 ***	.32 **	.43 ***	—	.26	.17
友人	.11	.13	.07	.42 ***	—	.03
父母	.28 *	-.05	.60 ***	.37 **	.10	—

* $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$.

注) 上段が女性、下段が男性の相関係数

性別による父親、母親、友人との間の心理的距離の特徴

性別による父親、母親、友人との間の心理的距離の間の相関係数の結果がTable 2である。男性では父親への心理的距離と母親への心理的距離との間に正の相関係数がみられ（ $r = .43, p < .001$ ）、母親への心理的距離と友人への心理的距離との間に正の相関係数がみられた（ $r = .42, p < .001$ ）。女性では父親、母親、友人との間の心理的距離に有意な相関係数はみられなかった。

以上より、男性においては、自分、父親、母親といった親子の心理的距離の関連性と、自分、

母親、友人との心理的距離の関連性が示された。

父親、母親、友人との心理的距離による分類

父親、母親、友人との心理的距離の 패턴を見るために階層的クラスター分析を行った。個体間の距離にはユークリッド距離、クラスターの結合法にはWard法を用いた。解釈可能性から本研究では4つのクラスターを採用した。各クラスターの人数比に性差がないかを χ^2 検定を用いて確認したところ、性差は見られなかった ($\chi^2(3) = 6.94, n.s.$)。そのため、以下において性別による検討は行わない。

Figure 2は各クラスターにおける父親、母親、友人との心理的距離をZ得点にしたものである。第3クラスターは父親、母親、友人との心理的距離が近いことがわかる。このことから、“近距離群”と命名した。第1クラスターは父親、母親、友人との心理的距離が第3クラスターほど近くはないが、3者との心理的距離が類似している。そこで、“中距離群”と命名した。第2クラスターは父親、母親との心理的距離が遠く、友人との心理的距離はそれよりも近いことが特徴である。そこで、“父母遠距離群”と命名した。第4クラスターは母親、友人との心理的距離は近いが、父親との心理的距離が遠いことが特徴である。そのため、“父遠距離群”とした。

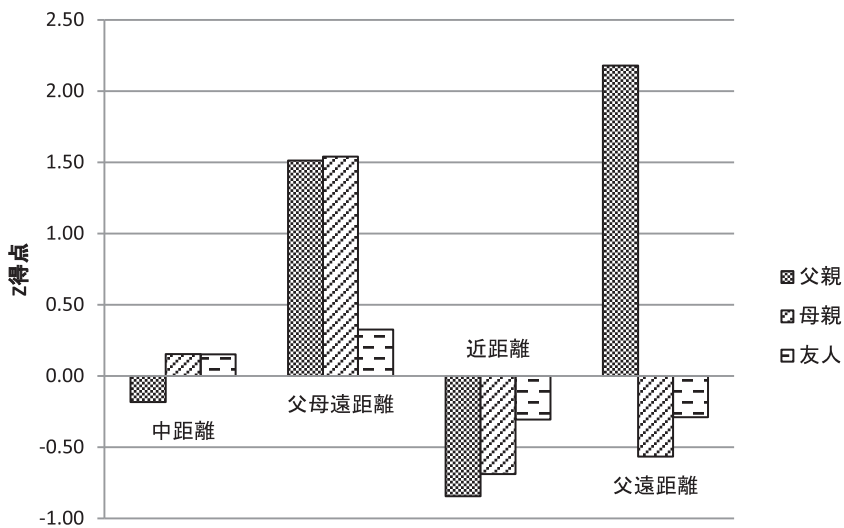


Figure 2 各クラスターの父親、母親、友人との心理的距離

その後、それぞれのクラスターの特徴を把握するため、多変量分散分析を用いてクラスター間の父親、母親、友人との心理的距離の比較を行なった。その結果がTable 3である。心理的距離においてクラスターによる有意差がみられた (Wilks' Lambda = .08, $F(9, 316.54) = 63.92$, $p < .001$, $\eta^2 = .57$)。Bonferroniの方法によって多重比較をした結果、クラスター間における父親への心理的距離の有意差は、父遠距離 > 父母遠距離 > 中距離 > 近距離となっていた。母親への心理的距離の有意差は、父母遠距離 > 中程度 > 父遠距離 > 近距離となっていた。友人への心理

的距離の有意差は、中距離・父母遠距離＞近距離・父遠距離となっていた。

Table 3 各クラスターの父親、母親、友人との間の心理的距離の平均値、SD

	中距離 (N=70)		父母遠距離 (N=15)		近距離 (N=40)		父遠距離 (N=11)		F(3,132)	η^2
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
父親	38.41a	13.97	105.80b	16.88	12.18c	9.33	132.33d	26.40	293.27***	.87
母親	27.43a	20.50	60.80b	28.30	7.16c	6.87	10.11d	12.61	34.88***	.44
友人	20.58a	29.63	24.73a	21.38	9.74b	8.73	10.16b	11.23	2.73*	.06

* $p < .05$; *** $p < .001$.

注) 異なるアルファベットがある群間は5%水準で有意
 同じアルファベットのある群間は有意差なし
 心理的距離の平均値の単位はmmである

各クラスターの親への愛着の特徴

それぞれのクラスターによる親への愛着の特徴を把握するため、多変量分散分析を用いて比較を行った。その結果がTable 4である。親への愛着においてクラスターによる有意差がみられた (Wilks' Lambda = .86, $F(6, 262) = 3.57, p < .01, \eta^2 = .08$)。Bonferroniの方法によって多重比較をした結果、愛着回避の有意差は、父母遠距離＞中距離＞近距離・父遠距離となっていた。愛着不安の有意差は、父母遠距離・中距離＞近距離・父遠距離となっていた。

Figure 3は各クラスターにおける親への愛着尺度をZ得点にしたものである。特徴的なのは、父遠距離群において愛着回避と愛着不安の両方が低いという結果が出たことである。母親と心理的距離が近い関係性ができていれば、愛着が良好に作られることがわかった。

Table 4 各クラスターによる愛着尺度の下位尺度の平均値、SD

	中距離		父母遠距離		近距離		父遠距離		F(3,132)	η^2
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD		
愛着回避	2.81a	0.79	3.41b	0.75	2.56c	0.54	2.44c	0.68	5.96**	.12
愛着不安	1.93a	0.80	2.02a	0.84	1.58b	0.68	1.49b	0.49	2.91*	.06

* $p < .05$; ** $p < .01$.

注) 異なるアルファベットがある群間は5%水準で有意
 同じアルファベットのある群間は有意差なし

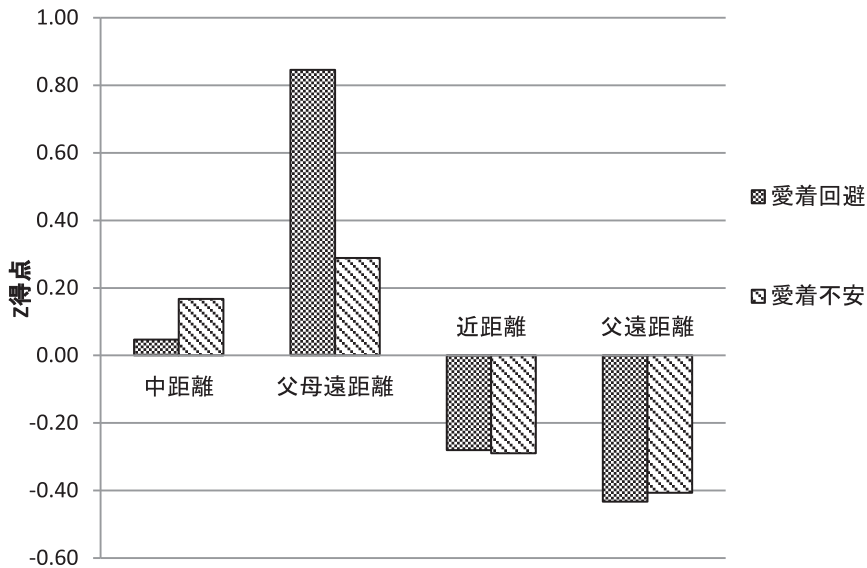


Figure3 各クラスターの愛着の様相

考察

父親、母親、友人との心理的距離の特徴に関する性差

父親、母親、友人との心理的距離の特徴を性別にまとめると以下ようになる。男性においては、友人、母親、父親の順に心理的距離が近いのに対して、女性は友人と母親が近く、父親がそれよりも遠くなるという結果となった。そして、父親、母親、友人との心理的距離の関連について、男性においては父親との心理的距離と母親との心理的距離、母親との心理的距離と友人との心理的距離に関連があったのに対し、女性では関連がみられなかった。

本研究のように描画テストで女性青年の親への心理的距離を測定した小澤（1996）では、父親との心理的距離の方が母親との心理的距離よりも遠いことが示されている。また、女性青年の親、友人との心理的距離を尺度で測定した金子（1989）でも本研究と同様に、友人と母親が心理的に近く、父親がそれよりも遠くなるという結果であった。このことから、女性においては先行研究と本研究では同じ結果が得られている。生まれた時から身の回りの世話や心理的ケアをしてもらえることが多い母親への心理的距離は父親よりも近くなりやすいと考えられる。また、親から心理的自立をしようとしている青年期では親よりも友人との心理的距離が近くなるのは妥当な結果だろう。そして、内閣府（2005）による『青少年の社会的自立に関する意識調査』において、女性青年において母親と“友達親子”²⁾だと感じている人が52.6%であることから、母親が友人と同じくらいの心理的距離にいることも納得できる。

しかし、父親、母親、友人との心理的距離の相互の相関関係では先行研究と異なった結果が示された。本研究での男性の結果と金子（1989）における女性の結果が同じであった。本研究では心理的距離を描画法という投影法に準じた方法を用いており、金子（1989）は尺度を使用している。投影法と質問紙法では測定している意識レベルが異なっていることが関連したのか

もしれない。

父親、母親、友人との心理的距離と親への愛着との関連の性差

男性においては親への愛着が父親、母親との心理的距離と関連していたのに対し、女性では母親、友人との心理的距離と関連していた。両親で比較すると、子どもが生まれた時から主要な育児の担い手は母親であることが多い。そのため、愛着が母親との関係を基に形成されることが多く、成長しても心理的に近い存在だと認識されやすい。しかし、父親に対する認識には男女で差がある。男性の場合は身近な父親を男性としての生き方や役割などのモデルとしていることが考えられるが、女性においては母親がモデルとなる。そのため、女性において父親との心理的距離と愛着との関連がみられなかったのだろう。

各クラスターの親への愛着の特徴

父母との心理的距離の大きい群であるほど親への愛着が不安定になるという結果は、相関係数で得られた結果と同じである。ただ、例外は父遠距離群であろう。母親、友人への心理的距離は近いが父親だけ心理的距離が大きいという、父母間で心理的距離が異なる場合、愛着回避、愛着不安ともに低いという結果がみられた。このことから、一方の親との心理的距離が近いと親への愛着は不安定にならないことがわかる。

Bowlby (1969) は単一の愛着対象との関係が愛着を形成するときの核となると述べており、両親のなかでも“母親役割を担う人”との1対1の関係を重要視した。しかし最近はその考え方は否定されつつある。父親母親それぞれとの関係の中で父親または母親への固有の愛着を形成していき、それが親に対する愛着として表象化されるとする階層化が考えられている (e.g. Overall, Fletcher & Friesen, 2003)。父親との心理的距離が遠く、頼りにしにくい場合でも、母親が近い存在としていれば、近い存在の親の方との愛着が強く表象化されることがわかる。両親の間で大きく異なった関係が作られている時の親への愛着の様相が示されたと言える。

今後の課題

本研究では父親、母親、友人への心理的距離の特徴と親への愛着との関連を示してきた。

今回は描画法で心理的距離を測定したが、対象との心理的距離が近いことが何を意味するのかの構成要素を明確にさせる必要があるだろう。金子 (1989) の定義からも心理的距離は複合的な概念であることが伺える。天貝 (1996) は他者信頼感との関連を示しているが、ストレス時の情緒的支援などもここに含まれることが考えられる。そうすることで、各クラスターで示された自分を取りまく3者との関係性に対する理解が促進されると思われる。

次に、各クラスターの関係性をもつ人の心理的特徴への検討が必要であろう。特に自尊感情やストレス対処行動など精神的健康にかかわる部分は検討すべきであると思われる。それによって介入方法が考えられるようになり、青年のよりよい発達促進を保障することにつながると思われる。

最後に、本研究では母親との心理的距離が近ければ、例えば父親との心理的距離が遠くても親

への愛着は安定的であるという結果だったが、母親と父親を逆転させても成立するのかどうかは今後検討する必要があるだろう。母親の方が子どもの生活において細やかな世話をする役割を担う家庭が多いためこのような結果が出たのか、もし母親との関係性が悪く、父親を頼れる近い存在として認識している場合でも同じ結果が出るのかについては、子どもの愛着形成において重要な検討であると思われる。

注

- 1) 愛着対象は養育者(親)が該当することが多い。
- 2) 女性青年－母親以外で友達親子だと感じている割合は、男性青年－父親が32.0%、男性青年－母親が35.6%、女性青年－父親が29.0%であった。

引用文献

- 天貝由美子 (1996). 中・高校生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究, 29, 130-134.
- Blos, P. (1979). *The adolescent passage*. Madison, Connecticut: International Universities Press.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss. Vol. 1. Loss*. London: Hogarth Press.
- (黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (2003). 母子関係の理論Ⅰ－愛着行動－ (新版) 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss. Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. London: Hogarth Press.
- (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1998). 母子関係の理論Ⅱ－分離不安－ (新版) 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss. Vol. 3. Sadness and depression*. London: Hogarth Press.
- (黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子 (訳) (1981). 母子関係の理論Ⅲ－対象喪失－ 岩崎学術出版社)
- Feeney, J. A. (2004). Adult attachment and relationship functioning under stressful conditions: Understanding partners' responses to conflict and challenge. In W.S. Rholes & J.A. Simpson (Eds.), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications* (pp. 339-364). New York: The Guilford press.
- (谷口弘一 (2008). ストレス状況下における成人アタッチメントと関係機能: 葛藤や攻撃に対するパートナーの反応の理解 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳) 成人のアタッチメント: 理論・研究・臨床 (pp. 304-328) 北大路書房)
- Hollingworth, L. S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: D.Appleton-Century Company.
- Kahn, R. L. & Antonucci, T. C. (1980). Convoys over the life course: Attachment, roles, and social support. In P. B. Baltes & O. G. Brim (Eds.), *Life-span development and behavior*. Vol. 3 (pp. 253-286). Academic Press.
- (遠藤利彦 (訳) (1993). 生涯にわたる「コンボイ」: 愛着・役割・社会的ささえ 東 洋・柏木恵子・高橋恵子 (編集・監訳) 生涯発達心理学2－気質・自己・パーソナリティ－ (pp. 33-70) 新曜社)
- 金子俊子 (1989). 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 3, 10-19.
- 内閣府 (2005). 平成16年度 青少年の社会的自立に関する意識調査
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/syakai/mokuji.html> (2016年3月10日)
- 内閣府 (2009). 第8回世界青年意識調査
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/worldyouth8/html/mokuji.html> (2016年3月8日)
- 丹羽智美 (2005). 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程 パーソナリティ研究, 13, 156-169.

Overall, N., Fletcher, G. J. O. & Friesen, M. D. (2003). Mapping the intimate relationship mind: Comparisons between three models of attachment representations. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 1479-1493.

小澤 真 (1996). 女子青年の独立意識と親子間の心理的距離との関連 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 34, 39-50.

Pipp, S., Shaver, P., Jennings, S., Lamborn, S. & Fischer, K. W. (1985). Adolescents' theories about the development of their relationship with parents. *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 991-1001.

高橋恵子 (2010). 人間関係の心理学—愛情のネットワークの生涯発達— 東京大学出版会

